

「黙示録の「封印、ラッパ、鉢」に関する新たな考察」

伝統的な解説として、この 3 つはそれぞれ「入れ子」状態になっており、7 つめの封印の中に 7 つのラッパの出来事が含まれ、さらにそのラッパの 7 つ目の中に 7 つの鉢の出来事が含まれるとされています。

これは、私の知る限りどの宗派でも変わりはないようです。

しかし、このとらえ方は、誤りである可能性が高いと思えます。

すでに 4 年近く前にシリーズ 3 部作としてアップした記事の(35 黙示録の[封印],[ラッパ],[鉢]の相互関係に関する考察-1)のなかで、「ラッパ」と「鉢」は入れ子ではなく、同一の出来事が、視点を変えた出来事として記されていることを指摘していますが、今回、改めて考察した結果、「封印」も入れ子ではないという根拠を提示したいと思います。ですからこの記事は、この 3 部作の記事の「一部改訂版」という位置づけになります。

これらの記述がいわゆる「入れ子」構造になっていると考えられている理由は、黙示 8:1 以降の記述によりますが、(そして、「鉢」の記述も「第 7 のラッパ」の後に記されている故に同じ構造になっているのだろうと推察した結果でしょう)果たして、本当に第 7 番目の封印の中にラッパの記述の出来事自体が含まれているのでしょうか？

問題は、それぞれの記述が、何処で終わっているのかを見極める事にかかってきます。

それぞれの記述の起点ははっきり分かります。また、最初から 6 番目までは、次の出来事の開始の直前までがその区切りであることが分かります。

しかし、いずれの場合も 7 番目については、何処までが、その内容の区切りであるのか明確に判断するのが難しい状況にあると言えます。

これを何も考えず、読み進めてゆきますと、確かに第 7 の封印が解かれた時の内容の中でラッパが吹き鳴らされているように読み取れます。

しかし、全てが入れ子構造になっているとみなして(つまり、「第 7 封印」の記述が厳密に何処までを指しているかの問題をせず)読んで行くなれば、いつの間にか最後まで読み終えてしまうでしょう。つまり、その後の記述は全部「第 7 封印」に含まれることになります。なぜなら、ここまでが、「第 7 封印」についての記述であると明確に記されている記述はないからです。

そうであれば、黙示録の大半の記述は「封印」についての記述で終始しているということになります。

しかし、以前の記事で示したように「封印」は実際の出来事ではなく、終末期にどんな出来事が予定されているのかを知らせる「予告編」であり、ダイジェスト版という性質を持つものです。(詳しくは No.35-37 の「黙示録の [封印], [ラッパ], [鉢] の相互関係に関する考察」をご覧ください)

明らかに 6 章以降の内容には、「封印」「ラッパ」「鉢」の内容とされる記述とは別の内容が記されていると言えます。

ですからやはり、各出来事が、何処で区切られているのかを正しく理解する必要がありますでしょう。

論理をはっきりさせるために、ここで、結論的なことを先に述べておくことにしましょう。つまり、「封印」「ラッパ」「鉢」は全て同一の期間に生じる同様の出来事を視点を変え、目的を変えて、3 通りの方法で表していると言う事です。

すでに話しましたが、「7 つの鉢」が「第 7 ラッパ」の中に包含されると読み取れる明確な記述は存在しません。

問題は、黙示 8 章の「第 7 封印」に関する記述です。

明らかなことは、第 7 封印が開かれた時に 7 人のみ使いのそれぞれにラッパが与えられたのを見た。ということです。

「神の御前に立つ七人の御使いを見た。彼らに七つのラッパが与えられた。」(黙示 8:5)

しかし、「第 7 封印」についての記述が何処までかを読み取ろうとするなら、文脈から言えば、別の内容に切り替わる 8:6 の「七つのラッパを持っていた七人の御使いはラッパを吹く用意をした。」もしくは、8:7 の「第一の御使いがラッパを吹き鳴らした。」あたりということになるでしょう。

さてここで、注目したいのは 8:5 後半の「すると、雷鳴と声といなずまと地震が起こった。」という部分です。

この内容は、実は他の 2 つの記述の最終部分に共通して現れるフレーズです。

改めてまとめてみますと。

「…すると、雷鳴と声といなずまと地震が起こった。」(黙示 8:5)

「…また、いなずま、声、雷鳴、地震が起こり、大きな雹が降った。」(黙示 11:19)

「すると、いなずまと声と雷鳴があり、大きな地震があった。この地震は人間が地上に住んで以来、かつてなかったほどのもので、それほど大きな、強い地震であった。」(黙示 16:18)

この「雷鳴、声、稲妻、地震、雹」などに関する描写は、16:18以降、17、18章にかけて記されている「大バビロン」の滅びに関する描写です。

つまりこれが神の裁きのフィナーレです。

つまり「封印、ラッパ、鉢」それぞれの記述は、同一期間の同様な出来事の最終結果であるところの「雷鳴、声、稲妻、地震、雹」などの、同様な記述によって締めくくられていることが分かります。

このことから、「第7封印」に関する記述は、恐らく8:6で終わっており、「封印」に関する記述はここで完結していると言って良いでしょう。